

## 島木赤彦

## —究極の理想としたもの上—

末竹 淳一郎

はじめに

赤彦が究極の理想として目ざしたのは「幽寂境」あるいは「幽(悠)遠相」、「寂寥相」と呼ばれるものであり、「詩といひ、歌といひ究まる所は人生の幽寂境に合するにあるのかも知れぬ」(「幽寂境」大正十四年七月『改造』)と述べ、つづいて「萬葉集の歌を雄揮であり、豪宕であるとするけれども、その雄偉、豪宕も究極する所は多くこの幽寂境に合するやうである。」(前同) 萬葉集と結びつけて論を展開したところは、独自の萬葉観を示すものであった。詩や歌のみならず、すべての芸術が帰入する「幽寂境」とは、いかなる境地をさすのであろうか。「萬葉集の系統」と題し、大正十二年十月二十二日、大連南満洲鉄道株式会社において講演した折には、萬葉集の歌は「人間の種々相を、具現して居りますが、究極に至りますれば、総ての芸術の最後に到達すべき人生の幽かに遠く音もしないやうな寂しい世界がある。それが一面からは嚴肅感、一面からは寂寥感であります。さう云ふ所に這入って居るのが萬葉集の肝腎な所である。」と力説している。これによると静寂で深遠な世界を思ひおこさせ、また『萬葉集諸相』(大正十二年六月十六日『東京日日新聞』)の中では、いくつかの萬葉の歌を例として示しながら、「一心の集中が深い沈潜となり、それが、おのづからにして人生の寂寥相幽遠相に入っている」とも言い、具体的な作品として『萬葉集の鑑賞及び其批評』(大正十四年十月)で人麿の「小竹の葉はみ山もさやに騒げども我れは妹思ふ別れ来ぬれば」について「思ひが悠遠で、情が自ら寂寥である。」とか、赤人の「三吉野の象山の際の木末には幾許もさわぐ鳥の声かも」について、「澄み入る所が自ら天地の寂寥相寂寥に合している。」と述べ、幽寂境をよく具現している代表的なものとなしているのである。このように赤彦の挙げる萬葉の歌は自然を歌ったものが多

く、天地自然に関しては、「思ふに、幽寂相なるものは、天地原始洪荒の相であつて、同時に、天地終焉の真相であらう。」「木は老い、雲は重なり、石は露れ、山は深くして愈々幽寂である。」という。さらにつづいて「幽寂相といふものも天地と共に生くる永遠の命であらう。」(「幽寂境」と述べている。そのような自然の命は、即ちそれに全心を集中してとらえ人間の生命に外ならないのであり、人間性を超えて、自然に帰入することによつて開かれるものであろう。このような考え方は「人間の生命が自然の生命と合するに至つて初めて自己の根源所に徹し得べし。」(『編輯所便』大正十一年八月)とする赤彦の人生観にも見られるものである。幽寂境もまた、その「根ざす所は純粹無雜不二途の童心である。」(「萬葉集諸相」と考えられるが、「人は口髭白を交ふるころよりこの消息に入り得る。」といわれているところからも結局、人生の諸相を究め尽くした末に、「所謂老境の究極所」(『しがらみ感相録』大正十四年四月)へ到達するのであろうか。

—

赤彦は十六歳にして作歌に志したということであるが、多少とも文芸意識をもつて新しい詩歌の世界に接したのは、明治二十七年、十九歳の春に入學した長野尋常師範学校においてであつた。在学中、二十二歳にして諏訪の旧高島藩士であつた久保田家の養嗣子となるべく明治三十年、久保田政信の長女うた(二十一歳と結婚(仮祝言)するなど実生活の面でも大きな変化があつたがこの学生生活によつて、精神的にいちじるしい成長を遂げることになった。赤彦と一緒に師範に入學し親友であつた太田水穂は師範学校における思想的潮流について「その一つは亜細亞主義もしくは東方主義ともいふべき山澤志士の硬的精神である。その精神をもつとも拡大してその行ひと志業との上に象徴したのが岡村と大森とであつた。(略)その二つは文学的精神の流れを代表したのが塚原(註赤彦のこと)と或ひは僕とであつたであらう。さうして之を催ふし、之を育んだのは福澤であつたであらう。その三つは哲學的傾向の流統である。(略)この三つの流れが相打ち相磨いてゐる間に、各は各の性格を互ひに融通して、翌三十年三月岡村や福澤が卒業する

頃には、われわれ十名ほどのものは、各の個性を保持しながらしかもその間に共通する一貫の好みを持たせられてゐた。(『アララギ』『島木赤彦追悼号』)といっている。第一に「山澤志士の硬的精神」、第二に「文学的精神の流れ」、第三に「哲学的傾向の流統」の三つに分かれ、赤彦は水穂らと共に第二の流れを代表すべく活躍したのである。

この頃の赤彦は万葉集に親しみながらも、歌よりもむしろ新体詩の方に興味をいだいていた。伏竜・二水・二水軒などの筆名で『文庫』『少年文庫』『青年文』『少年園』『早稲田文学』『小文学』『もしほ草紙』新聞『日本』等に投稿した作品の数を見ても師範学校在学中の作品は\* (註1) 新体詩の方が短歌をはるかに上まわっている。そこでこの頃の赤彦の文学活動を知る手がかりに新体詩を一瞥する必要がある。赤彦の新体詩には、「亡き父」(明治二十七年)、「幼弟」(明治二十八年)、「爺」(明治二十八年)などの題名からも察することができるように肉親のことに取材したものと、「帰郷」(明治二十八年)、「ひなの夕暮」(明治二十八年)、「諏訪のうみ」(明治二十八年)、「柴刈」(明治二十八年)などのように故郷の自然、農村の日常生活をモチーフとしているものと大別できる。諏訪高原の美しい自然環境を詠い、親子・兄弟などとの家族的な愛情を好んで詠んでいるのは、ひとえに赤彦の素朴で純真な性格と深くかわりあつたものである。それにしても

君もわが身も親なし子

はからずここに出であひて

さびしき笑みに見かはしし

われらが胸のかよわさよ

\* (註2) 「夕時雨」—従弟なりし少年にあひて—明治二十九年十一月とか、

よに情けある母ゆゑに

そのこの姉はいきしかど

葦間のよどに夕まぐれ

二つのからぞ浮かびたる

この世をともし旅だちし

たまの行へはしらねども

いだきあひたるしかばねは

おなじ木蔭に埋むとかや

\* (註3) 「川藻」明治三十年

と歌っている「親なし子」、「二つのから」、「しかばね」などの言葉から連想する一連の暗いイメージはいつたどこからくるものであろうか。赤彦の年譜(赤彦全集第八巻)を見ると、九歳(明治十八年)にして母を亡くしたことはじまり、その悲しみもさめやらぬ二ヶ月後に弟に先立たれ、やがて十六歳(明治二十四年)にして兄が没するというように相次いで肉親と死別したことが、悲痛な体験となつて感傷的なイメージを生みだしたのに相違いない。

太田水穂によると、師範入学当初、赤彦は福澤天真という先輩の啓発によつて文庫派の官崎湖処子を慕っていたが、ある日偶然、雑誌『文学界』を手にしたころから、島崎藤村の「うすごほり」などの作品に触れ、「塚原(赤彦)と僕との眼を拭はせ」(『アララギ』『島木赤彦追悼号』)られ、いっぺんに魅了されてしまったという。さらに「藤村子のもたらした詩の響きは高さと深さと、大胆さとに於いて、全く僕たちの詩概念を崩壊さすほどのものであった」(『アララギ』前同)と水穂はいっている。師範卒業後、赴任した玉川小学校(明治三十三年から同三十七年まで在職)で生徒に『若菜集』を読み聞かせたのは勿論のこと、それを写させたりしている。(金原省吾『赤彦の生涯』参照)こうした藤村への傾倒によつて、文庫派の詩人にあきたらなかつた赤彦の詩情は育まれていった。作品の上では「諏訪湖畔に立ちて」(明治二十七年の

さびしくひろき國の上

翼をのばす荒鷲も

菅の荒野の森かげに

夕すがたをひそめたり

とか、

十月風の吹き落ちて

諏訪の榛原早く枯れ

さびしき冬の湖に

堅く氷のとつる頃

というように信州の風景を叙しながら

あはるかなる天の戸

月日の懸り照るきはみ

湛へし水は山深き

信濃の谷に静かなれ

と結んでいる。この詩は「ゆふべ西風吹き落ちて」「あうらさびし天地の」「風の行衛を誰か知る」と詠まれた藤村の「秋風の歌」からの影響とみられるが、おのずから藤村の作品とは違った様相を示している。つまり\*（註4）藤村と同世代であり、彼に傾倒したとはいえ赤彦の作品はすくなくとも現実の叙景を再現するのにとどまり、藤村ほどの浪漫的な熱情や、自我の目覚めに発した「近代の悲哀と煩悶」（『合本藤村詩集』序明治三十七年九月）に迫るものではなかったのである。なお、\*（註5）赤彦の新体詩について、日夏恋うこう之介は『明治大正詩史』（昭和二十三年）のなかで「凡庸陳套の感情以外何ものもない作物を公けにしてゐたが『文庫』に一貫する日本的な温和な詩人であつた。」といい、「彼が後短歌に入って『切火』の卓れた歌人になったことはこの時代のどこの作を見ても豫感できない。」（傍点筆者）と評しているが、この傾向は短歌の上にも見られるものであつた。

\*（註1）明治二十七年から同三十一年の間の作品の数を見ると短歌二十七、新体詩四十八となっている。（「西水行吟」に含まれた一群の短歌を別にす

る）

\*（註2）「夕時雨」の最初の一連を取り上げた。

明治二十九年十一月「文庫」第三卷六号に発表されたものである。

\*（註3）「川藻」の最後の二連を取り上げた。

明治三十年三月「文庫」第四卷第六号に発表されたものである。

\*（註4）藤村は明治五年（一八七二）生れで赤彦（明治九年）より四歳年上である。

\*（註5）「爺」という作品についての批評である。

## 二

赤彦の作歌は、平田派の国学者松沢義章の門人で、明治初年諏訪郡豊平村下古田の支校に奉職して、いわゆる郷先生として一生をささげた父・塚原浅茅の手ほどきによって始められた。歌を詠みはじめた頃の商品として、

世もかくははかなき物よ紅葉の深きよりはや散初にけり

（「暮秋山」明治二十六年）

何方にタ立すらん日の影はてりつつよする風のすずしき

（「遠夕立」明治二十六年）

むら雨のなこりの露をまくらにて千草の床に鈴虫のなく

（「雨後虫」明治二十七年）

などをあげることができる。森山汀川は、これらの歌を「それがたとへ月並であるにもせよ、斯うまでに手のこもった作を成されたのは容易な事ではなく（略）、早くもその豊かな天分の自らなる発露を窺ひ知るる」（『アララギ赤彦記念号』）と評しているが、「豊かな天分の自らなる発露を窺ひ知るるのは無理というもので、むしろ、いずれの歌も月並調というほかはない。

明治二十六年といえは、落合直文が短歌革新の旗印の下に「あさ香社」を創立し、同二十七年には、短歌革新運動に飛躍的發展をもたらした与謝野鉄幹の歌論『亡国の音』が発表され、中央歌壇での革新的な気運は盛り上っていたのであるが、ただ赤彦はこの気運とは無関係であつたといえる。しかし、その後の

花すすき萩女郎花さまさまに手折りて居れば野辺暮れんとす

(「偶詠」明治二十九年)

二つ三つちりのこりたる桑の葉にあきつとびをり夕暮の空

(「初冬」明治三十年)

浅間山みねのけぶりの立ちあへず雲場野かけてふく風かな

(「旅にてよめる」明治三十一年)

などの歌になると、「詞句運用の上に無駄がなくて、取扱はれた題材に、古さを感じさせない風雅な味」(『島木赤彦』高田浪吉昭和十八年十月)とはいえないまでも、いく分月並ぐささもぬけ「相当単純化」(高田浪吉、前同)されてくる。また、斎藤茂吉が「人麿ばりのみならず」「その哀韻はやはり人麿声調にかよふものがある」(『アララギ』赤彦記念号)と評した「弔生徒北條伝死歌並反歌」(明治三十二年)には例えば、

雲井まで名のりあぐべき音をすてて死出の山路に入るほととぎす

大みねの山たちわかれ行雲をなれにたぐへて見るぞ悲しき

などの万葉調の作品もあり、師範在学中『万葉集』を全巻読破したことの影響とみることができ、そういうところに「根岸派」に接近する可能性を秘めていたと考えられる。

根岸派とは根岸短歌会のことである。正岡子規を中心に明治三十二年三月、香取秀真、岡麓、伊藤左千夫、長塚節等の歌人が集まって作ったもので、特別の機関誌はなく、子規が選をしていた新聞『日本』を多くその舞台としていた。長野県の世界では、新聞『日本』が最も多く読まれていたとのことで、「子規先生の俳句が早く県内に行き亘り、続いて其の新短歌が行き亘った」(森山汀川『アララギ』赤彦記念号)のである。このように子規を中心とする根岸派の俳句・短歌革新運動も浸透していった状況の中で、赤彦は明治三十三年一月、子規が新聞『日本』に「森」の題で短歌募集を行ったとき、十四首の歌を子規のもとへ送ったのである。十四首中入選したのは

藍毘尼の林の中に光満ちてあもりたまひし釈迦牟尼ほとけ

一首のみで、「予は自分の勉強が不足してゐると思うたから夫れ以後自分一人で歌の勉強をしてゐた」(「左千夫先生と信濃」大正八年と述懐している)。

明治三十三年五月下旬、赴任した諏訪郡玉川小学校においては『諏訪文学』を出し、日本派の俳人であった岩本木外や森山汀川等と俳句を作り、初めて来訪した汀川に「おれも今迄は主に新体詩を作つて来たが、これからは歌を作る」(「初対面の憶ひ出から」大正十五年『アララギ』)といったように短歌にも力を注いだ。白萩の花しだり咲く奥庭の書院の石に下駄おきてあり

(「白萩」明治三十三年)

朝戸出の萩しどろなる庭たづみ雨の花びら浮きて流るる

(「七草集」明治三十五年)

いませりし病の床に一度もはべり見ずして今ぞくやしき

(「悼子規士追善」明治三十五年)

などの歌からは、子規の唱えた「万葉調」と「写実」的な境地をおし進めようとする前向きな姿が、うかがえる。また、「和歌漫語」(『諏訪文学』明治三十三年、三十四年)と題し、かなりまとまった歌壇評を発表している。それによると旧派の歌は無論のこと、新派の最先鋒であった与謝野鉄幹についても、その漢語交りの和歌を見て世人は「抱腹絶倒の声を合せた」とし、「鉄幹の破格らしくりし産声は、鉄幹自身のものでなくて天下の産声であつた」のであり、「才気に勝つた所があつて、却つて研究の態度を欠如して居る」などと難じている。落合直文、佐々木信綱等については「用語や取材の着眼が比較的新しい方面に注がれ」ているが、「想は依然として旧時代」であると論じている。その反面、根岸派については「生々たる活気を文界の一隅に現出した」として、その革新運動に自らも参加しようという意気が感じられるのである。さらに図画などの教育面においても写生をもつて基礎とするべきであるとの新しい教育法を主張し、「児童に発表の興味を起させるに於て、写生が大なる力を有することは予の経験し得た所である」(信濃教



育」大正八年五月号)と述べ、実践しているが、ここにも子規の写生説への傾倒がみられる。こうして根岸系の歌人として歩みはじめた赤彦は、明治三十五年末、「つばな会」を結成し、翌年一月、矢ヶ崎奇峰、太田水穂、森山汀川、岩本木外らと『比牟呂』を創刊する。明治三十六年六月には、伊藤左千夫を中心とする根岸派の機関誌『馬酔木』が出、赤彦等は『比牟呂』を左千夫の許に送り、教えを乞うなど根岸派との交流を積極的に深めていったのである。

その結果、明治三十七年二月には左千夫が信濃を訪れ、翌三十八年六月には、赤彦が上京して子規庵を訪問、左千夫とも会っている。同年九月には、長塚節を諏訪に迎えることになった。この間の論文として『比牟呂』に発表した「目に触れたる和歌を評す」(明治三十六年)をあげることができる。与謝野晶子、鉄幹、佐々木信綱、落合直文、服部躬治等の作品を評し、現短歌界の欠陥を「写真の欠乏」に見出して「真率」な「実情」・「感情」・「観察」ということを当面の課題として、よりいっそう写実主義的立場を明確にしたのである。

### 三

明治四十二年三月になって赤彦が、東筑摩郡広丘小学校に校長兼訓導として単身赴任したことは、歌人としての生涯に新たな時期をもたらすものであった。「広丘は私の一生中最も印象を深く止めた土地であります。」(三村りゑ宛書簡大正三年六月五日付)とか、「広丘にて小生の歌は育てられ申候」(三村りゑ宛書簡大正三年九月二日付)と明確に述べているように、広丘での体験が赤彦に与えたものは大きい。赤彦の歌人としての本格的な歩みは、ここからはじまると見てよい。また、広丘時代の歌は『馬鈴薯の花』(大正二年七月)の前半部を占め、たとえば村憲吉との合著とはいえ、歌歴の古い赤彦がその第一歌集を広丘時代の歌をもつてはじめていることにも注目するべきである。

当時の広丘村は松本市の南、桔梗ヶ原とよばれる平野の片隅に位置し、森の中にわずかにひらけた孤村であった。職務は意外に閑であつたらしく、「毎日火鉢に對してたばこを吸ふのみ」などと記しているが、残雪にとざされた中で、いやお

うなく家に残してきた妻子のことが思い出され、周囲の光景と相まって「寂寥」を感じさせないではおかなかった。(篠原円太宛書簡、明治四十二年三月十七日)「此の如き境遇は一生中矢張り余り多からざるべし」と言い、「故に余は努めて自己の境遇を批評するの態度を離れ、充分に浩平の味を嘗むるつもりに候嘗むるといへば己に多少客観的な嫌ひあり故に只無言の積りに候、歌にせんなどとは思ひも見ず。」(篠原円太宛書簡、前同)と述べているような心境で毎日を通すごしながらも、歌は自ら湧き出てきたのである。

げんげん田に寝ころぶしつ行く雲のとおちの人を思ひたのしむ  
げんげんの花原めぐるいくすぢの水遠くあふ夕映も見ゆ  
妻子らを遠くおき来ていとまあみ心さびしく花ふみあそぶ

「客居」(明治四十二年)と題するこれらの歌からはのびのびとした浪漫的な気分が伝わってくる。澄明とでもいふべき境地は、内面に寂寥感をただよわせながらも、赤彦の安らぎの気持からでてきたのであろうか。

つぎに「広丘村」(明治四十三年)一連になると、

草枯の野のへにみつる昼すぎの光の下に動くものなし  
冬野吹く風をばげしみ戸をとちて夕灯をともし妻遠く在り  
冬枯の野に向く窓や夕ぐれ寒さ早かり目は照らしつつ

のように瞑想的な歌が詠まれるようになったが、さて同じ「広丘村」の一連、いとつよき日ざしに照らふ丹の頬を草の深みにあひ見つるかな  
草の日のいきれの申にわぎもこの丈けはかくろうわが腕のへに

夏草のいよよ深きにつつましき心かなしくきはまりにけり

などは、寂寥の生活の中で、赤彦の前に一人の女性が現われて、彼の心を動かすこととなった結果の歌である。その相手というのが赤彦赴任の翌日、松本女子師範の新卒業生として広丘小学校に赴任してきた中原静子(閑古)その人であった。同じ下宿(牛屋)の離れに住み、時折赤彦が催していた短歌会に集まった弟子の一人であり、学校では部下の一人であった。例えば「男も女も極めて真面目な人で

ある。真面目な人たちであるから、情の激する割合に動作は控へ目である。控へ目な動作の中に、充実した情の激しさを堪へて居る。草は弥々深く、日は益々熱苦しい。斯様な強烈の光景の中で、強烈な二人の情を活動させたかったのであった。」(『アララギ』第四巻第四号、明治四十四年四月)と最後の歌に赤彦自ら注をしていることから、師弟の関係をこえた恋愛であったことが、おおよそ察しがつくであろう。妻子を持つ身の赤彦にとって、日々の苦悩は大きかったに違いないが、所詮あきらめなければならぬ中年に及んで初めて知った恋であった。後年「年がひもなくはずかしい事だと思ふけれどない」(「柿の村人先生時代」若山喜志子『アララギ赤彦追悼号』)と述懐し、「今桔梗ヶ原の一隅に帰って来て昔の自分の生活を夜の野の村に偲んで居るのであります。そしには悲しい思い出が充ち満ちて」(金原よしを宛書簡、明治四十五年六月十二日)いると述べている。

このような悲しみと苦悩に満ちた赤彦にとって二人の友、堀内卓(明治四十三年十月)と望月光(明治四十四年一月)の相次ぐ死は、さらにその悲しみを深くしたのである。二人を偲んで、

この昔に来てあそびたる友二人亡き人となりしきのふの如し

(「林の村を去る」明治四十四年)

と詠み、「松本平に我が友は少い。その少い友のうちから、堀内君と望月君相前後して俄然形を没した。形を没した筑摩野は冬枯の林である。冬の林に芽が萌えても、筑摩の平原は永久に僕のために寂しい平原であらねばならぬ」(「日曜一信」明治四十四年三月十九日)と書いている。さて、「いささかの心の動きに冬がれの林の村を去らんと思ひし」(明治四十四年)と歌った赤彦は、広丘を去るにあたり「離情依々苔に臥して歌うて曰く」(「日曜一信」明治四十四年三月十九日)と題して、

斯くのごとなしき胸を森ふかき青苔の上に一人居りつつ

この森の奥どこも丹の花のとはにさくらん森のおくどこに

この森のをはりの歩みやはらかに苔に触りつつ日に暮るるかな

(「林の村を去る」明治四十四年)

と歌い、数々の思いを胸に林の村を去るのである。『馬鈴薯の花』(中村憲吉との合著第一歌集)は、アララギ叢書第一編として大正二年七月一日、東京東雲堂書店から発行され、赤彦三十四歳(明治四十二年)から三十八歳(大正二年)までの歌二百七十一首が収められている。歌集後半部を占めている諏訪郡玉川小学校時代は、明治四十四年三月、校長として赴任したときからはじまる。玉川村とは、八ヶ岳の山裾を占める山浦地方のことで、郷里に近く、かつて在住したこともあった。土田耕平をはじめ、中村憲吉や斎藤茂吉などと親交をあたためているものの孤独な生活であつたらしく、「私は近頃余り話を致しません。一人で自分を見つめる時の多からんを希ひます」(中原しづ子宛書簡、明治四十四年二十六日)と述べている。玉川村に移ってから赤彦は広丘時代とさしてかわらぬ詠みぶりを示している。

ゐろり火の次の室くらく宵ふけて物さびしらいや火を焚きぬ

(「据野の家」明治四十四年)

たまたまに汽車とどまれば冬さびの山の駅に人の音すも

(「山の駅」明治四十五年)

朝照る日のうすら霜ひえびえと蓼の丹茎にとけて沁むかな

やはり広丘時代の名残りともいふべき秘められた苦悩のあとがうかがわれ、「内省的な寂寥味」(「島木赤彦」本林勝夫、和歌文学講座九巻)から脱しきれないでいる。そのほかには土地の牧歌的な風俗に目をとめて、

あるものは萩刈日和木瓜の果を二人つみつ相恋ひにけり

あるものは草刈小屋の草月夜ねぶりて妻をぬすまれにけり

(以上「あるものは」明治四十五年)

のような「漫画デモ書クヤウナ」(甲村憲吉宛書簡、明治四十五年三月二日)、「文章で云へば小品文位のつもり」(「消息」アララギ第五巻第三号、明治四十五年第三号)で気楽に詠んだものであるけれど、農村生活の中に見出された純朴な人間性

に目をつけている点にこそ、赤彦の生き方の根底にふれるものがあることを見逃してはなるまい。

明治四十三年九月「消息」(『アララギ』第三卷第七号)で、同人の歌は子規の時代から『馬酔木』初期にかけて、事物を直写して「甚だ静か」であつたものが、『馬酔木』終期より『アララギ』初期にいたつては、対象に自己を同化し個性を出すため「主観の響き」が多くなり、「動」の傾向を示すに至つたが、今や、「シミジミの感」を含んだ「静」に帰りつつあるとアララギの傾向を論じている。「動的・静的な只異なつた一つの現象である。その大もとは只一つの真情に帰るのである。」と説いている。「和歌根本の生命は真摯のみ」(「課題の歌肥つきて」明治四十三年十一月二十一日『長野新聞』)という、かねてからの写実主義的な姿勢を保つていたにしろ、新しい傾向に進むために「刺激的ナ動的ナ傾向カラ進ンデ静的ナ瞑想的ナモノニ移ル」(金原よしを宛書簡、明治四十四年十一月二十一日)といっているのもうなずけよう。

この頃の歌壇は、ようやく明星派的ロマンティズムが後退し、代つて自然主義の風潮が支配しつつあつた。つまり明治四十一年一月に発刊された『スバル』によつて北原白秋や吉井勇が耽美的な作風で名を高め、土岐哀果や石川啄木などの生活派も台頭してきたのである。なかでも自然主義を建前とする前田夕暮と若山牧水の活躍は目をみはるものがあり、牧水は四十三年三月に雑誌『創作』を、夕暮はその翌年四月に『詩歌』をそれぞれ創刊し、世の注目を集めた。

そういう風潮にいち早く接したのは、古泉干樫や斎藤茂吉であつたが、赤彦は「新しい歌の運動にも色々の種類が見えるようであるが、私どもの感興を惹くやうなのが目に入らない」といい、「それ等の人々と私どもとは依然として別の道を歩いて居るやうである。別の道を歩く人は歩く人の自由である。」(「明治四十四年の歌」『南信日日新聞』明治四十五年一月五日)とも述べて新しい表現を求めながらも、「アララギ」から一步も出ようとはしなかつた。だが、自然主義の大きな流れの前には次第次第にその影響を受けていくのであつた。作歌の上では、玉川

村の終わり頃より乱調が著しくなる。

夕日の朱を吸ひ盛るくわんざうの花に男はあはれなりけり

(「無題」明治四十五年)

夏の桑黒き青みにわが心日にけに染みて腐るなりけり

(「夏家居」明治四十五年)

すぐ其所に、粟稗の畠、白棒の裂けたる幹、獣の女

(「無題」明治四十五年)

今の我をすこし押したらばそのままに倒れんとする日は暮れにつつ

(「無題」大正二年)

今までの浪漫的な歌境とはうつつかわつて、驚くばかりのかわりようであり、退廃的な感じの漂つたものが多い。このような傾向は「アララギ」の他の若い作家たちにもみられるもので、茂吉は次のような作歌例をとりあげている。(「アララギ二十五年史」昭和八年一月)

花のうへにそよると物の消えしかば我等思はず相見けるかも

(中村憲吉)

厚かべのまどに夕日のあせぬれば毛唐は更にひくく歌ひき

(土屋文明)

ほれ葉腎虚のくすり気ちがひの感応丸とうたひあげたり

(斎藤茂吉)

また、アララギ「赤彦記念号」(昭和十一年十月)で赤彦との間に交流のある歌として茂吉は、

暗し暗しかの唐茄子の花底に密吸ふ虻もくさり居るらん

(赤彦・明治四十五年)

赤茄子の腐れてゐたるところより幾程もなき歩みなりけり

(茂吉・明治四十四年)

おのが身を思ひかへればつまらなく火鉢の炭をつつきて居たり

おのが身をいとほしみつつ帰り来る夕細道に柿の花落つも

(赤彦・大正元年)

現し身のわれなるかなと歎かひて火桶を近く身に寄せにけり

(茂吉・明治四十四年)

など数首を掲げているが、表現の上だけでなく、「自己に対する憐情や虚弱の意識」(北住敏夫、歌人講座『近代歌人』)においても共通するものがある。そして

いまだ、他から影響を受けることが多いのは、赤彦の内部に精神的動揺があつて、未だ定まった歌風が確立されていなかったのである。したがって、『馬鈴薯の花』の末期において初期の浪漫的な世界は消え失せ、次第に自然主義的な世界に身を転じていったのである。

#### 四

『切火』を刊行するにあたり、赤彦自ら「深く人生の悲律に共鳴せる」(広告文、大正四年)、「沈潜の悲界より念々分沁せる」(アララギ会員宛書簡、大正四年二月二十一日)ものと称した歌集とはどのようなものであつたろうか。

大正二年七月、『馬鈴薯の花』を刊行した頃から、柿の村人の号にかえて島木赤彦の筆名を用いるようになった。このことは新たな転機にさしかかっていたことを示唆するもので、「文学などに対する考えも段々変り候共これも自然の不可抗力に従ふに過ぎず」(長塚節宛書簡、大正二年十一月十四日)と述べている。『アララギ』の歌にも、「今少し噴き出すやうな生き生きした生命を欲し候」(飯山鶴雄宛書簡、大正二年十月九日)といい、「真に自分の胎内に動いてゐる黒い血と赤い血を以て直ちに自分の歌を染める時ではありませんか」(「消息」大正二年十月、『アララギ』第六卷第九号)といい、「歌は何処までも燃えて居らねばならぬ」(「消息」大正三年六月、『アララギ』第七卷第五号)と情熱的に個性の確立を唱えた。

第二歌集『切火』は、大正二年の後半から三年の作品を収録し、大正四年三月に刊行された。歌集『切火』の第一の特色には、次のような歌が見出される。

夕焼空焦げきはまれる下にして氷らんとする湖の静けさ

(「諏訪湖」大正二年)

冬空の天の夕焼にひたりたる褐色の湖は動かざりけり

(前同)

うつくしき血しほを指に染めにつつ生きものの命さきて我れ居り

(「赤盤栗の花」大正二年)

赤き血しほ地に垂れてあはれ炎々と燃えあがる青き茎の上の花

(前同)

太陽ぞ炎の上に堪へにける炎の上に揺るる太陽

(「野に焚く火」大正三年)

夕やけの光の街は瓦斯の灯の青くあやしく満ちゆかんとす

(「夕焼」大正三年)

野分すぎ裸のをんな赤あかと腰に布せり炭団を持ちて

(「炭団」大正三年)

すでに前掲の歌の中に、「夏の桑の黒き青み」とか、「夕日の朱」などの色彩の濃厚ものがあつたが、ここには「夕焼」、「褐色」、「血しほ」、「太陽」、「夕やけの光」、「赤あかと」など赤い色を中心にして強烈な印象を与える歌が多く、感覚的なまなましさを感じさせずにはおかない。例えば、「夕焼の空」と「褐色の湖」、「赤き血しほ」と「青き茎」、「夕やけの光」と「青く」などの色彩が対置され、あたかも油絵のような感じがする。事実赤彦はこの頃(大正二年の春、『白樺』の主催で開催された美術展覧会に信州からわざわざ上京し、ゴッホ、ゴーガン等の後期印象派の絵画を見ている。特にゴーガンの「画家の母」という絵に心を動かされて、「哀れで気の毒でなつかしい画だね。切ない堪えられない時はあの画を思ひ出してゐる。日本に偉れた画家と偉れた音楽家が欲しいね」(大正二年七月『アララギ』第六卷六号)と記している。また、島木赤彦という名も「ゴーガンのタヒティの島から暗示」(『童馬山房夜話』斎藤茂吉、昭和二十一年十)を得たものであ

ると言われている。ゴッホやゴーガンの絵画から示唆されるものがあつたに違いないが、一連の歌をみると、あくまで一つの試みとして終っている感じが強く、まだ模索の状態であつたといわなければならぬまい。

人に告ぐる悲しみならず秋草に息を白じると吐きにけるかも

(「御牧ヶ原」大正二年)

夕寒き世がなかに入りてゆくおのが姿のくろくもあるか

(「乾ける空気」大正二年)

この青む草の広のかなしみをしじめ集むる丹の煩なりけり

(「流らふ色」大正二年)

眼のかぎり冷えつくしたる娑婆の道に人ぼろぼろと別れゆくかな

(「闇深く」大正二年)

し

などの歌においては、赤彦のさびしい後姿をかい間見る思いがする。ここで玉川村での赤彦の生活状態をみなければならぬ。玉川村から憲吉にあてた手紙の中で「私はどうしても安静な心にはなれないで苦しいよ」(明治四十五年四月四日)と訴えている。明治四十五年六月諏訪郡視学に任金されて、「年々と私も引きしめられるやうな境地にはまつて行く。」(「消息」大正元年十月、『アララギ』第五卷第十号)と赤彦らしからぬことを言い、「僕の心の影は黒く暗い影法師だ」(中村憲吉宛書簡、大正元年十月一日)とか、「私の近頃は黒いものの中にやつと小さい眼をあけてしよばしよば見廻してゐるやうな気がしてゐる」(太田喜志子宛書簡、大正元年九月二十九日)と述べ、「哀れな私の四十姿ガ氣ノ毒ニ目ニツイテクル」(中村憲吉宛書簡、大正二年九月五日)といった安定を欠く毎日であつた。

広丘を去り、一度は中原静子と別れることを決意したにもかかわらず、二人の関係は依然として続き、赤彦の心に大きな負担となつていたのである。負担といえ、長男政彦が眼病にて、一時失明し東京の病院に入院したことも赤彦の苦悩の一因であつたらしく、

静もれる車上の姿、みづからの病を知れる吾子が静もり

この父の顔見ゆるかとむごきこと問ふと思ひて問ひにけるかも  
父はけふ国にかへると聞きわけし幼き顔を見てやりにけり

(「病院」大正二年)

のように子に対する暖かい親の愛情が感じられる反面、悲痛な響きのこもった歌も詠まれた。赤彦本来の格調の高い

青葉の窓あやに明るみ削り水ゆ白き蒸気たつ昼深みかも

(「帰省其一」大正三年)

昔見て今もこもらふ羊齒唾の葉の暗がりふかく釣瓶を吊るも

(「帰省其二」大正三年)

街風はや秋ならしぬば玉の夜目にしるく雲流れ見ゆ

(「(騎)馬」大正三年)

などの叙景歌もあり、透徹した観照と対象を的確にとらえ写實的に表現しているところなど、後に「写生」の境地として確立されるものの礎となるものである。ところで、この間の赤彦は大正三年三月限り、郡視学の職を辞し、信濃を去るにあたり、

雪のこる土のくほみの一ところここを通りてなほ還ゆくか

今は世ははるかなるなと雪どけの水たまりへにかへり見にけり

(「国を出づる歌」大正三年)

と詠んで単身上京した。淑徳女学校で国語漢文の教員として教鞭をとりながら、『アララギ』の編集に専念することとなつたのである。上京の直接の動機は、在京同人の茂吉には外遊が予定されていたこと、小泉千樫の怠慢のため『アララギ』が遅刊し、継続して刊行できるかどうか危ぶまれていたことが主な理由であつた。ちょうどこの頃の歌壇は、『創作』、『詩歌』、『スバル』等の諸雑誌があいついで刊行され、『生活と芸術』が土岐哀果によつて発刊されるなど盛況を呈していた。

そのような中で、『アララギ』は、大正二年七月、左千夫の死去によつて大きな痛手をこうむつたが、夕暮の『陰影』、牧水の『死か芸術か』、白秋の『桐の花』

など新刊の歌集に同人達が批評を加え、外部からは木下杢太郎、阿部次郎などに寄稿を求め、新しい思潮を取り入れ、『馬鈴薯の花』について茂吉の『赤光』を刊行するに至り、ようやく世の注目を集めたのである。だが、しばしば遅刊、休刊の『アララギ』はしだいに経営難となっていたのである。

もう一つの動機には、いまだ中原静子との関係が継続していて、妻ふじのと家庭的にうまくいっていないばかりか、夫と妻でありながら、ますます二人の心は離ればなれになって行く状態であった。「信濃を去るという方が急務」で、「或る重いものに圧され圧されて絞り出されるというやうに信濃を去る自分になっていた。」(「消息」大正三年六月、『アララギ』第七巻第五号)という言葉に象徴されるように、赤彦の肉面的な苦悩がにじみ出ている。

新生への思いをこめて上京した赤彦であったが、『アララギ』再建に努力しながらも「近頃一人で堪らぬ今日一日中引籠りふとん着て居れり、私の頭だんだん馬鹿になりさう也」(中村憲吉宛書簡、大正三年五月四日)と憲吉に書き送っている。このような状態での再建への仕事はうまくいくはずがなかった。

大正三年十月二十一日、突如、赤彦は八丈島に渡り、約二十日間滞在することになる。出発に際し、中原静子に宛てて「例の遊び癖出で」「永くは遊ばず御安心下され」とか「諸人に知せず微行のつもりに候へば多く御吹聴無之やう願上候」(書簡、大正三年十月二十日)とか、言いながらも心中穏やかならず、より複雑であったろう。「半永住のつもり」(横山重「久保田先生」)であったとも言われている。さて、八丈島の自然と人情は、その温順な気候とともに疲れきった赤彦の心を癒したばかりでなく、再び生き生きと甦らせたのである。

天の原はるばる来つつ現かも海のいる深く黒き山二つ  
夕焼の空はあせぬれ深ぶかと波のうねりの片光りすも

ふかぶかと霧雨の中に船笛のこだま響かふ山近みかも

(「船上其一」大正三年)

(「船上其二」大正三年)

荒磯岩黒ぐろと霧はれにけり冬の芒の青みたる見ゆ

などの歌からは「危くすれば狂的になりはせぬか」(中村憲吉宛書簡、大正三年十一月四日)と思われるほど、かつて苦しんだ赤彦の歌とは思えないくらいにのびのびと明るい。山国育ちにとって南国の特異な風物は極めて珍しく、興趣をさそわれたに違いない。

月の下の光さびしみ踊り子のからだぐるとまはりけるかも

(「島の踊」大正三年)

椿の蔭をんな音なく来りけり白き布団を乾しにけるかも  
はらはらと布団をすべる椿の花上にぞ止まる昼は深けれ

(「椿の木」大正三年)

青々し芒のなかに一ぴきの牛を追ひ越しはるかなる道

(「島の芒」大正三年)

バナナの茎夕日に光り列びたり深ぶかとして葉かげは暗く

(「バナナ畑」大正三年)

日の光明らさまなる岩の上ゆ見入らざらめや波の青みを

(「ある時は」大正三年)

などのように鮮明に詠いあげ、ここで取り上げた一首目、二首目は発表当時、評判となったもので、前田夕暮は「椿の木」の歌はみなよいと思ふ。(『切火』の歌合評、大正四年『アララギ』)と述べ、とくに北原白秋は「純一極まる」(前同)と讃えたのである。「けるかも」という三句切れの句法にも、新しい工夫がなされ赤彦自身「融層の一団でありながら第三句で一旦切れてゐるために、前句後句間に静かな感得の余地を与へる所に特徴がある。」と述べ、「沁み沁みとした感受を与へる似は此の点にある」(「乙字氏の歌評につきて」赤彦、大正五年五月『アララギ』)と述べている。その後、赤彦歌風の一特色となったものである。以上のように『切火』巻頭を飾る大作「八丈島」は乱調期を克服し、写生短歌完成への第一歩を踏み出したものであった。

(二〇〇八年一〇月一〇日 受理)